

## 第7回 ノルダウ／大日本文明協会編『現代の墮落』

日本におけるワイルド受容史を紐解く時、マックス・ノルダウ (Max Nordau, 1849-1923)を無視することはできない。特に、明治時代に本間久雄によるワイルド紹介が行われる以前は、ノルダウのワイルド観が主流を占めることとなった。大正時代に入ると、全訳ではないものの『現代の墮落』(大日本文明協会事務所)として翻訳されたことが、現在でも完訳本が出版されていないことを考えると貴重な文献と言えよう。

### (1) マックス・ノルダウ

ノルダウは嘉永2年(1849)にハンガリーのブタペスト、ユダヤ人のラビ(律法学者)の息子として生まれた。本名はマックス・シモン・ジュートフェルト(Max Simon Südfeld)。ウィーンでのジャーナリスティックな仕事を経て、ブタペストに戻り医学を修めた。精神病理学者として、文筆家として注目を浴びるようになったのは明治16年(1883)の『文化人の常套的虚言』(*Die conventionellen Lügen der Kulutrellen- menschheit*)で、日本では明治40年(1907)1月に『現代文明と批判』(隆文館)の題名で翻訳された。*Entartung*が発表されたのは明治25-26年(1892-1893)で、2年後には英訳版*Degeneration*が出版された。ノルダウの受容状況を簡単にまとめると以下の通りである。

1902年10月 善六「陳列場たより」(『学燈』第65号)

\* *Paradoxes, Conventional Lies of Our Civilization, Degeration* の  
入荷案内がある。

1902年11月 長谷川天溪「マックス、ノルダウ」(『早稲田学報』第  
76号)

1902年12月 愛天生「文学的成功の秘訣如何」(『帝国文学』第8巻第  
12号)

1906年 9月 ノルダウ／劍菱（正宗忠夫）訳『パラドックス』読売新聞社

1907年 1月 ノルダウ／桐生悠々訳『現代文明と批判』隆文館

1909年 12月 文東生「ノルダウの芸術論」（『学燈』第13年第12号）

もちろん、上記以外にもデカダン論などでも触れられているが、本格的なワイルド論が日本で展開される以前は、ノルダウのワイルド観が紹介されることが主流であり、日本のワイルド紹介に大きな影響を与えていたのである。なお、日本へのノルダウの受容研究には以下のものもあることも紹介しておきたい。

1934年 6月 本間久雄「世紀末文学思潮」（『イギリス文学史 十九世紀（下）』英語英文学刊行会）

1969年 12月 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期（第1部）」（『鶴見女子大学紀要』第7号）

1970年 4月 矢野禾積「象徴主義移入の歴史」（富士川英郎編『東洋の詩 西洋の詩』朝日出版社）

1994年 4月 千足伸行「マックス・ノルダウの『デカダンス論』と世紀末芸術」（成城大学文芸学部編『成城大学文芸学部 創立四十周年記念論集』成城大学文芸学部）

1996年 6月 佐々木隆「明治時代のワイルド受容」（『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、武蔵野短期大学）

2002年 11月 鎌倉芳信「自然主義文学とマックス・ノルダウ」（『国文学言語と文芸』第119号、おうふう）

2005年 11月 加藤洋介「香水をつけたハンカチ——マックス・ノルダウの退化論と『虞美人草』——」（『漱石研究』第18号、翰林書房）

2006年 11月 佐々木隆「デカダン論のワイルド紹介」（『書誌から見た日本ワイルド受容研究（明治編）』（イーコン）

## (2) 『現代の墮落』の概要

明治時代のワイルド理解に大きな影響を及ぼしたマックス・ノルダウの *Entartung* (1893, 英訳 1895) は、大正3年(1914)に『現代の墮落』(大日本文明協会事務所)として抄訳、出版された。抄訳とは言え、現在まで完訳本がないだけに貴重な文献である。「序」は坪内雄蔵が執筆し、例言は大日本文明協会とあるが、その本文中で訳者が中島茂一であることが記されている。しかし、奥付では編輯兼発行者として大日本文明協会とある。

大正に入るとホルブルック・ジャクソン(Holbrook Jackson, 1874-1948) の *The Eighteen Nineties* (1913) の影響があらわれ、翻訳は昭和18年(1943)に大塚宣也訳『近代英吉利文学論』(肇書房)として抄訳出版され、平成2年(1990)には澤井勇訳『世紀末イギリスの芸術と思想』(松柏社)として完訳された。

『現代の墮落』の構成は「第一篇 世紀末」「第二篇 神秘主義」「第三篇 主我狂」「第四篇 写実主義」「第五篇 二十世紀」「附録 非墮落論」となっている。ワイルドについては「第三篇 主我狂」の「第三章 廃頹派及耽美派」において言及されている。英訳本では‘BOOK III. EGO-MANIA’の‘CHAPTER I. THE PSYCHOLOGY OF EGO-MANIA’と‘CHAPTER III. DECADENTS AND AESTHETES’にあたる。ノルダウの他の作品の翻訳については明治39年(1906)9月の剣菱訳『パラドックス』(読売新聞社)や明治40年(1907)1月の桐生悠々訳『現代文明と批判』(隆文館)がある。『現代の墮落』については、昭和44年(1969)12月の井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド—移入期(第一部)」(『鶴見女子大学紀要』第7号)と平成6年(1994)4月の千足伸行「マックス・ノルダウの『デカダンス論』と世紀末芸術」(成城大学文芸学部編『成城大学文芸学部創立四十年周年記念論集』成城大学文芸学部)がよい参考となる。大日本文明協会編『現代の墮落』については、これまでのワイルド書誌ではほとんど扱われていないことを付け加えておきたい。

### (3) 坪内雄蔵の「序」

『現代の墮落』の「序」は坪内雄蔵(1859-1935)が文章を寄せている。

古来、文芸家を論ずる者に隠然として二大派あり、一は文芸家の立場を絶対的と看做し、其対社会的利害関係を悉く其照準の外に置かんとするもの、一は然らざるもの。前者は所謂芸術の為めの芸術、若しくは創造の為めの芸術等に立脚せる者の主張なり。<sup>(1)</sup>

坪内は文藝家の立場を明らかにし、ノルダウはもちろん後者の見地に立つものであり、文芸と社会の利害との相関関係を、

文藝家の作品を以て、全社会又は全民族の精神的趣向を標示せるものと解し、其不健全なる作物の喜ばれ、もてはやされ、崇拜せらるるに至る所以のものは、世を挙つて神経衰弱者なるが故にして、彼等は取りも直さず、當頽廢時代の精神的不具者を代表せるものに外ならずと做すなり。<sup>(2)</sup>

とし、ノルダウをこの見地に立つ者として紹介している。

### (4) 「第三篇 主我狂」「第三章 頽廢化及耽美」

ワイルドを比較的よく取り上げているのが「第三篇 主我狂」である。まず、その下位項目を対応する英語表記とともに見てみたい。

第一章 主我狂の心理

第二章 高踏派及悪魔派

第三章 頽廢派及耽美派

第四章 イブセン主義

第五章 フリードリヒ・ニーチェ

CHAPTER I THE PSYCHOLOGY OF EGO-MANIA

CHAPTER II PARNASSIAN AND DIABOLISTS

CHAPTER III DECADENTS AND AESTHETES

CHAPTER IV IBSENISM

CHAPTER V RRIEDICH NIETZCHE <sup>(3)</sup>

翻訳の「第三章 廢類派及耽美派」は pp.247-262、“CHAPTER III DECADENTS AND AESTHETES”は pp.296-337 であり、まさに抄訳である。ワイルドへの言及については次の文より始まる。

オスカー・ワイルドは明らかに不道德と罪悪と讚歎せり。<sup>(4)</sup>

Oscar Wilde apparently admires immorality, sin and crime. <sup>(5)</sup>

また、文中において次のような記述もあるので注目しておきたい。

耽美主義の教理は、かの高踏派と等しく、藝術がそれ自身の目的なり。<sup>(6)</sup>

the doctrine of the ‘AEsthetes’ affirms, with the Parnassians, that the work of art is its own aim. <sup>(7)</sup>

「第三章 廢類派及耽美派」の最後は次のように結ばれている。翻訳と原文を取り上げてみたい。

要するにかの主我狂者と、デカダンと、耽美主義者とは、悉く健全なる文明人より排斥せられて、同一旗幟の下に集合したるものに外ならざるなり<sup>(8)</sup>

Ego-maniacs, Decadents and Aesthetes have completely gathered under banner this refuse of civiled peoples, and march at its head. <sup>(9)</sup>

## まとめ

ノルダウの強い影響については、明治 36 年(1903)5 月に安藤勝一郎が無書子の名で『帝国文学』(第 9 巻第 5 号)に発表した「デカダン論」に見ることができる。

無書子「デカダン論」では、デカダンの傾向をラファエル前派と見做すのはひとつの便宜ととらえ、18 世紀フランスの *Hydropathe* が後に *Decadent* の名で伝播されたものととらえた。デカダンの顕著なる現象として次の 4 点を指摘している。

1. 自我意義の上下と相表裏する所
2. ロウマンティックとデカダンと因縁浅からざる所
3. 記号主義デカダン神秘主義の交叉点はその自然の実質を拒みて唯暗示風韻を把持すべき理想
4. 女性的<sup>(10)</sup>

「ロウマンティックは主として自然主義写実主義或いは究理主義に反動して起これる現象なり其神秘主義記号主義に没入するは当然の径路のみ」や「女性主義の勃興と俱にデカダン作家殊に仏の文人は概ねその運動に同情を表し為めに努力するを惜まざりき」の指摘は注目に値する。<sup>(11)</sup> また、ワイルドは「自然を忘却して自己崇拜に陥れる我利々々主義者」と評するなどノルダウの影響を無視することはできない。<sup>(12)</sup> このことは、*Degeneration* の第 3 編の「EGO-MANIA」中の第 3 章「DECADENTS AND AETHETES」と比べれば明らかである。<sup>(13)</sup> ノルダウの影響は明治時代より根強いものがあるが、大正時代に抄訳とは言え翻訳が出版されたことは、書誌的に見ても注目しなければならないだろう。

## 参考資料

- 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期（第一部）」（『鶴見女子大学紀要』第7号、1969年12月）
- 佐々木隆「大正時代のワイルド受容」（『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月）

## 注

- (1) ノルダウ／大日本文明協会編『現代の墮落』（大日本文明協会事務所、1914年3月）、pp.1-2.
- (2) Ibid., p.4.
- (3) Nordau, Max. *Degeneration* (Lincoln and London: University of Nebraska Press).
- \* Translated from the second edition of the German work.
- Introduction by George L. Moose.
- (4) 『現代の墮落』、p.258.
- (5) *Degeneration*, p.320.
- (6) 『現代の墮落』、p.260.
- (7) *Degeneration*, p.322.
- (8) 『現代の墮落』、p.262.
- (9) *Degeneration*, p.337/
- (10) 無書子「デカンダ論」（『帝国文学』第19巻第5号、1903年5月）、pp.900-902.
- (11) Ibid., p.901.
- (12) Ibid., p.903.
- (13) 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期（第1部）」（『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月）、p.44.